【リリカルなのはStrikerS・ＳＳ】「たかまちさんち」

犬助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ・ＳＳ】「たかまちさんち」

【Ｎコード】

Ｎ２９１１Ｌ

【作者名】

犬助

【あらすじ】

高町さんちのよくある風景。

【リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ・ＳＳ２】「たかまちさんち」

管理局員寮夜半。高町なのは一等空尉の夜は比較的早い。戦技教導官という立場から早寝早起きによる体調管理という観点が大きくはあるが、今は今でまた違った要因もある。

「なのはママー！」

ぽてぽてと走り寄ってくる可愛い義娘…いやさ心情的には義娘などでは無く、本当の娘のように思っているヴィヴィオ。彼女はまだ幼いがゆえに眠りも早く、その甘えたがりな性格からなのはと共に就寝する事を常としていた。

「なのは……もう準備出来た？」

「うんフェイトちゃん、もう明かり消してもいいよ」

ルームメイトにて親友、そして戦友でもあるフェイトが部屋の明かりを落とす。枕もとの薄明かりや足元の安全灯の柔らかな光を残してあたりは穏やかな闇に包まれた。なのはママとフェイトママの二人の間で眠る。それがヴィヴィオの謳歌する人としての幸せである。

しかしこの日は珍しく目が冴えていたのか、ヴィヴィオは中々眠ろうとしない。なのはとフェイトの間をころころと転がっては交互に抱きつくというマニア垂涎の行為を幾度となく繰り返すも、やはり眠りは訪れないようだ。

「……ママ、何かお話して？」

あまりの退屈さに間をもてあましたのか、ヴィヴィオは二人に寝物語をせがむ。眠れずに転がるヴィヴィオが気になっていた為に幸い二人も眠ってはいなかった。

「うーん……じゃあ何のお話しようか……」

なのはの故郷、第９７管理外世界には「おとぎ話」や「昔話」という子供の寝物語には事欠かない。その中からどれを話そうかと思案していた所である。

「あのね、ママたちの昔のお話が聞きたい！」

薄闇の中、パッと華やぐヴィヴィオの笑顔。そしてその「お願い」に、二人は少しばかり気恥ずかしくなる。出会った頃の、「友達」になった頃の…友達になるその過程を。それは昔話として語るには少し気恥ずかしい、だけど誇らしい物語。

「うん……そうだね、じゃあ私とフェイトママが出会った頃の話をしようか」

「うん！」

なのはがフェイトを見やると、フェイトは恥ずかしそうに頬を染めている。そして二人はぽつりぽつりと語り始めた。彼女たちの昔語りを。

最初は魔法など知らなかった事。

ロストロギアを封印して回った最初の「使命」。

その中でフェイトと出会った事。

そしてフェイトと出会った頃の事で、言いよどんだ。あの頃の事をフェイトは今はどう思っているのだろう。ジュエルシードを集めていた理由、そしてそれを命じたその人の事をどう言い表せば良かったろう。だが、そんななのはを見てフェイトが僅かばかり微笑んだ。

「あのね……その時フェイトママは良くない事……悪い事をしてたの」

「……フェイトちゃ……」

つい悲しくなってフェイトの名を呼びかけるが、フェイトはそれを優しい笑顔で遮った。小さく首を振ると、気にしないでと笑う。

「その時、なのはママは何度も何度も私に話しかけてくれて…力になるよって言ってくれて……」

「……うん」

大切な思い出を懐かしく語るフェイトに、ヴィヴィオも食い入るように聞き入った。

「そして私はなのはに……抱かれたの」

「ちょっと待った」

ピシャリと遮った。当のフェイトは「何？　どうしたの？」といった感じでキョトンと見ている。ヴィヴィオはフェイトの表情と語り口調と単語が上手く繋がらなかったようで、またキョトンとしている。

「フェイトちゃん！？　さすがにというかその表現はどうかと思うの！！」

「え？　でもなのはスゴかったよ？　（バインドで）縛り付けてから（スターライトブレイカーで魔力防御を）メチャクチャにされて……その後に優しく（お姫様だっこで）抱いてくれたじゃない。」
「ちょっとおおぉぉぉ！？　待って！　色々経緯が抜けてるし表現が間違ってるよ！？」

フェイトには不思議なくらい悪気が無かった。しかし悪気が無いのがより嫌だ。

「……なのはママってすごかったの？」
「うん……なのはのピンクのぶっといの（注：スターライトブレイカー）で貫かれたときは目の前が真っ白になっちゃった…。」
「フェイトちゃんんんッ！！！？　ねえ！　わざと！？　わざとだよね？　私、今日何か気に障ることしたな！？」

なのはさん涙目です。しかしフェイトには微塵も悪気は無い。フェイトからすればなのはは敬愛する親友であり恩人だ。悪意を以って攻撃するなどありえない。

「ちょ……なのは！落ち着いて……ホラお水……！」

原因はアンタだよ！　と全力全開で突っ込みたかったがなんだかもう半泣きで嗚咽が邪魔をする。とりあえず喋らなければ話が流れていくと思っていたが…。

「……！！　ヴィヴィオわかった！　ピンクのぶっといの！！」

ブパァンッ！！

噴いた。もう全力で噴いた。フェイトに差し出された水が霧状に

なって宙を舞うくらい鮮やかに噴いた。

「あのね！　ヴィヴィオもピンクのぶっといのされたよ！！　五本！」

「ケホッ……ちょ……！！　ヴィヴィオ五本じゃないよ！　あれのカウントは五『発』だよ！？　五発！！」

咽ながらも必死に訂正。このままではヴィヴィオまで無自覚に大変な発言をする子になってしまう。

「そんな……ヴィヴィオはまだ小さいのに五回もヤったの！？」

「うわあぁぁぁんフェイトちゃんのＡＨＯ－－－－－－－－－－－－ッ！！」

「待ってなのは！　そのパジャマで走ったらパンツ見えるよッ！？」

そんな静止の声も聞かず、泣きながら脱兎の如く駆けて行くなのはさん。ぱんつは薄ピンクでした。

「なのはママ……どうしたのかな……」

「うん……心配だよ……」

無自覚の悪魔は眩しいくらいの純粋さでなのはを気遣っていた。ちなみに高町さんちでは意外と日常の風景であり、これまでもこれからも振り回されていく予定である。

－－－－その頃、無限書庫－－－－－－

「う……うぅ……酷いよ……あの二人は天然エロスだよ……」

器用に空中で三角座りしながら泣きぬれるエースオブエース。しかしそれを見てユーノがポツリと漏らす。

「いや……なのはも充分無自覚エロスだよ……」

如何に親友とはいえ異性、そこにパジャマ＋ノーブラ（公式設定）で飛び込んできた挙句空中を漂いつつ三角座りである。パンチラも甚だしい。

「レイジングハート……」

【Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　Ｍａｓｔｅｒ．】

「え？　ちょ！？　なのは……！？」

「ユーノくんの……ユーノ君のドあほーーーーーーーーーーーー！！！」

その日、天から地を貫くピンクのぶっといのが観測されたという。

《終》

（後書き）

フェイトがボケるのがウチのスタンダード。
なのはさんは常識人ですよ、きっと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2911l/

【リリカルなのはStrikerS・ＳＳ】「たかまちさんち」

2010年11月12日21時18分発行